

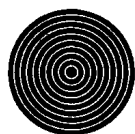
# 扉のむこうの 子どもたち

斎藤次郎著

日本エディタースタール出版部

斎藤次郎著

扉のむこうの  
子どもたち



日本エディタースクール出版部

斎藤次郎(さいとうじろう)

1939年埼玉県生れ。法政大学文学部日本文学科卒。子ども調査研究所員。主な著書に『擬似への挑戦』(三一書房)、『共犯の回路』(プロンズ社)、『子どもたちの現在』(風媒社)、『子育て原論』『青春の発見』『瀕死の教室』(教育出版)、『子どもを見直す』(中公新書)、『小さな同時代人』(冬樹社)、『子ども漫画の世界』(現代書館)、『インド子連れ旅』(サンマーク出版)などがある。

扉のむこうの子どもたち

一九八二年十一月十五日 第一刷発行

定価 一二〇〇円

著者 斎藤次郎

発行者 吉田公彦

発行所 日本エディタースクール出版部

〒一六二 東京都新宿区市ケ谷田町一―六

電話(〇三三)二六〇―五八九一(代)

(〇三三)二六七―四九五二(直)

© 斎藤次郎 一九八二年

精興社印刷・松岳社製本  
カバート／サンワ印刷紙工

## はじめに

本を読むたのしみは、本の世界にすっぱり嵌りこんで登場人物とともにその小宇宙をかけめぐるとだと思えます。原則的には確かにそうなのですが、本の世界の外側に強い関心事がある場合は、本に没入しつつも、その中に自分の関心を満足させる要素を探し求めるくせがついてしまいます。ぼくは二十年近く性慾りもなく、子どもという存在に片恋にも似た関心を抱き続けてきたので、小説を読むときも、つい文中の子どもの気持や行動に注意が傾くという状態になってしまいました。

本屋で背表紙を眺めているときも、そこに「子ども」とか「少年」とか「児童」とかという活字が見つかると、反射的に手が出ます。もうこうなったらひらきなおるしかありません。小説でもなんでも、子ども中心で読んでやれ、という気になりました。しかし、そう腹をきめてかかると、案外子どもの活躍する小説は数多くないのです。

はじめに  
この世の中には男がいて、女がいる。小説の中でもいろいろなタイプの男や女が登場し、愛しあったり、争ったりします。男しか登場しない小説、というのも珍しいし、女だけの小説も数少ないはずですが、けれど、これをおとなと子どもという分類でみると、現実にはおとなと子どもがごっちゃまぜで暮らしているのに、小説の中では、子どもの出番が意外に少ないのです。

おとなが書いておとなが読む小説の中に、子どもがあまり登場しないのは、おとなたちのふだんの関心や夢が子どもの頭ごしにとびかっていることの結果かもしれない。恋愛小説には子どもはじやまだし、殺人事件のなぞを解く推理小説でも子どもはかえって足手まといでしょう。

もっとも、おとなの生活領域の中で、特に家庭に焦点を合わせてその日常の中に人間性の真実を探し求めるとき、ようやく子どもの存在が作家の意識にのびります。例えば、結婚して子どもが生まれる、そののっぴきならない関係を軸に生きるおとなを描くとなれば、もう子どもを無視することはできません。子どもがおとなたちの「生き方」の試金石として用いられることだってあるでしょう。

さらにまた、ある年齢に達した作家は、必ずと言ってよいほど、自らの少年時代を回想して作品を生みだします。懐しさのあまり、と言うより、書く主体としての自己への絶えずくり返される探索がいつしか「子ども時代」にまで到達してしまうからでしょう。「私」はどのようにして「私」たりえたのか、という古典的な文学の主題を正面からとらえようとするとき、作家は自分の子ども時代を見すえざるをえないようです。大岡昇平の『幼年』や井上靖の『しろばんば』など、こうした自伝的作品にもすぐれたものが少なくありません。

では一体、なぜ作家は自己を語るとき「子ども」の時代にまでさかのぼらざるをえなくなるのでしょうか。

近代文学は長い間「近代的自我」の確立をめざして歴史社会的な制約と闘い、人間性の究極の解放を訴えてきました。が、自覚的に自己を対象化する、というのは青春においてはじめて可能なことで、

「子どもの時代」とは自我意識以前の世界です。作家たちは、「私」がどのようにして「私」となったのかを問い続けた結果、いまだ「私」を獲得するに至っていない自分自身へ追求の目を向けるようになったのです。自分が体験したこと、体験した時代であってみれば、確かにそれらは自分に属している。にもかかわらず、自覚的に「私」は意識されていない。その不思議な時空を「私」の揺籃として対象化したとき、確立すべき自我そのものが、ひとつの選択であり、ひとつの喪失であったことに気づいたのでした。

それからもう一つ、こういう問題もあります。今日の社会と文化は、近代（ということとは工業社会ということでもあり、石油文化ということでもあります）の矛盾の深刻な深まりに直面しているわけで、核兵器や公害が人間の生命をおびやかすものとして前方に立ちほだかり、後方には上げ底式に「向上」した生活上のさまざまな無理が露呈しています。「近代」はほんとうに人間の英知による選択であったのかどうか、根本的な問い直しが必要になってきたとさえ言えるでしょう。とすれば、文学の世界においても、近代的な人間疎外と闘う試みの一つとして、近代的でない人間像の模索が不可避になったのかも知れません。さまざまな不合理と幻想を内に秘めながらおとな社会の制約の中で生き続ける子どもたちが、作家たちの関心を集めはじめた、という事情も考え合わせてみるべきでしょう。

子どもは、おとな社会として実現した近代へのアンチテーゼとして、あるいは近代的自我の確立という精神史の暗部として、あらためて注目される根拠を持つに至ったのです。

現代作家の諸作品を読むと、家庭という場を選んだ小説、自伝的小説のほかに、子どもを描ききることを自己目的化した作品にもよくぶつかるとなりました。それらは、神話と呪術の世界に半ば浸りながら現実と拮抗している子どもによって、おとなの内的荒廃を撃ち、世界の秩序を裏返してみせるもくろみでもあるのでしょうか。

そんなことに目を配りつつ、小説の中で子どもがどう生きているか、作家のどういう思いがその子どもを創造したのか、を探ってみようと本漁りをはじめました。

手に入りやすい同時代の本、それもひとまず日本に限るという条件で五十冊ほどの本をご紹介します。します。

タイトルの「扉のむこう」というのは、本を開くと最初にあらわれる飾りページを「扉」と呼ぶ習慣に従ったものです。フィクションというもうひとつの世界に至る「扉」だから、そういう呼び名が生まれたのでしょうか、それなら小説の主人公は「扉のむこうの子どもたち」と呼ぶのにふさわしい人たちです。

ごいっしょに、ドアをたたいてみませんか。

一九八二年十月

斎藤次郎

# 目次

はじめに ..... i

## I 子どもという不思議

|   |             |                  |       |    |
|---|-------------|------------------|-------|----|
| 1 | タブーを犯す興奮    | * 黒井千次・禁域        | ..... | 二  |
| 2 | 子どもであることの不安 | * 三木卓・砲撃のあとで     | ..... | 六  |
| 3 | 幻の安息地       | * 中沢けい・海上の家      | ..... | 一〇 |
| 4 | 夢と現実の往復     | * 福永武彦・夢みる少年の昼と夜 | ..... | 一五 |
| 5 | わからないことの連鎖  | * 富岡多恵子・少女たちの桜通り | ..... | 二〇 |
| 6 | 没入を拒否する回想   | * 高橋和巳・捨子物語      | ..... | 二四 |

## II 「いま」は子どもに棲みよいか

|   |             |               |       |    |
|---|-------------|---------------|-------|----|
| 1 | 共棲のバイブレーション | * 石牟礼道子・樺の海の記 | ..... | 三〇 |
| 2 | 社会の残虐と少女の覚醒 | * 津島佑子・燃える風   | ..... | 三四 |

|   |            |                |   |
|---|------------|----------------|---|
| 3 | 北海道で発見したもの | * 倉本聰・北の国から    | 三 |
| 4 | いれこ仕掛けの孤独  | * なだいなだ・れとると   | 四 |
| 5 | おとなの傲慢に抗して | * 井上ひさし・偽原始人   | 四 |
| 6 | 「遊び」という救い  | * 北杜夫・天井裏の子供たち | 五 |
| 7 | 子どもの成立以前   | * 吉村昭・破船       | 五 |

### III 親と子の絆

|   |            |              |   |
|---|------------|--------------|---|
| 1 | 共に生きる時の重さ  | * 清岡卓行・幼い夢と  | 六 |
| 2 | 「母親」の発見    | * 青野聰・母と子の契約 | 七 |
| 3 | 「父」への自己投企  | * 北杜夫・ことも    | 七 |
| 4 | 護符としての子ども  | * 萩尾望都・訪問者   | 九 |
| 5 | 父と子の旅路     | * 水上勉・父と子    | 二 |
| 6 | 子どもが要請する試練 | * 三木卓・震える舌   | 六 |

### IV 教育の夢と現実

|   |               |                   |   |
|---|---------------|-------------------|---|
| 1 | ペストセラーが提起するもの | * 黒柳徹子・窓ぎわのトットちゃん | 六 |
|---|---------------|-------------------|---|

## V 回想の子ども時代

|      |                |                  |     |
|------|----------------|------------------|-----|
| 2    | 「生活」を見える志      | * 高井有一・真実の学校     | 101 |
| 3    | 子育て戦争の敵        | * 矢崎藍・ああ子育て戦争    | 106 |
| 4    | 子どもへの手の貸し方     | * 三好京三・子育てごっこ    | 110 |
| 5    | 家庭の空白、子どもの自閉   | * 本間洋平・家族ゲーム     | 116 |
| 6    | 「校内暴力」対策の陥穽    | * 津本陽・敗れる教師      | 120 |
| 7    | 「子どもの危機」という新風俗 | * 三浦朱門・若葉学習塾     | 125 |
| <br> |                |                  |     |
| 1    | 古きよき時代からの提言    | * 藤田順子・子供の領分     | 133 |
| 2    | 記憶再生の厳密な手続き    | * 石井桃子・幼ものがたり    | 136 |
| 3    | 蘇る濃密な気配        | * 古島敏雄・子供たちの大正時代 | 139 |
| 4    | 確かな過去を生き直す     | * 大岡昇平・幼年／少年     | 143 |
| 5    | 手さぐりの自己形成      | * 井上靖・しろばんば      | 151 |
| 6    | 異議申立ての屈折       | * 矢沢永吉・成り上がり     | 156 |
| 7    | 鬱屈の時代の影絵       | * 矢島輝夫・子供的情景     | 160 |

## VI 子どもへの殺意

- 1 僥倖がひきずる影 \*三浦哲郎・木馬の騎手……………一六六
- 2 孤独な憔悴が育てる殺意 \*井上光晴・あの子たちの眠った日……………一六九
- 3 「寺子屋」のドラマツルギー \*小松左京・闇の中の子供……………一七四
- 4 恐しい未来 \*星新一・ピーターパンの島……………一七八
- 5 生き延びた子の復讐 \*村上龍・コインロッカー・ベイビーズ……………一八二

## VII もう一つの戦場

- 1 「野坂昭如の妹」の世代から \*野坂昭如・火垂るの墓……………一九〇
- 2 疎開先にも「戦争」がある \*高井有一・少年たちの戦場……………一九四
- 3 子どもなりの戦争責任 \*中根美宝子・疎開学童の日記……………一九九
- 4 国家意志による子殺し \*大城立裕・対馬丸……………二〇三
- 5 子どもたちのヒロシマ \*長田新編・原爆の子……………二〇七
- 6 戦争は悲惨なだけか……………二二三

VIII 名づけられない苛立ち

|              |               |    |
|--------------|---------------|----|
| 1 哀しい嵐の季節    | * 阿部昭・子供部屋    | 二六 |
| 2 犬はもうひとりの自分 | * 高橋三千綱・怒れど犬  | 二三 |
| 3 必死の求愛      | * 三木卓・胸、くるしくて | 二六 |
| 4 孤独という最後の武器 | * 萩原葉子・蓼麻の家   | 二三 |
| 5 子ども時代との訣別  | * 宮本輝・螢川      | 二六 |
| おわりの扉        |               | 二四 |
| 引用図書一覧       |               | 二五 |

装本・堀内誠一

# I 子どもという不思議

# 1 タブーを犯す興奮

黒井千次・禁域

子どもというものは不思議なものです。その内面に彼らは、おとなには諒解しがたい何かを宿しています。それが神々しい輝きを放つときもあれば、禍々しい兆しと見えることもあります。子どもの心奥深くに分け入った作家たちの仕事を紹介しながら、不思議の意味を考えてみたいと思います。

例えば子どもの万引き。これを大衆消費社会の病理現象なんて図式化してしまわないで、子どもに即して考えてみるとどうなるでしょうか。子どもにとって「盗む」というのは、どういうことなのでしょう。お店の品物や友だちのおもちゃを見て、「あつ、あれがほしい」と思うと、もう前後の見境なく手が伸びてしまうのだ、と考える人もいるでしょう。「手癖が悪い」なんて言葉があるくらいだから、盗むという行為には習慣性があるのかもしれない。あまり極端な場合だと、心の病気というふうに扱われたりもします。

わが子が、盗みを働いたなどという事態に直面すると、親は大変なショックを受けます。「いったいどうして……」と胸が苦しくなります。けれど、とことん子どもの心の中までは知るわけにはいきません。

ところで、あなたは子どものとき、小さな盗みを働きましたか。とんでもない、そんなバカ

なことを、とお思ひになるかもしれませんが、でも、さらに心を澄まして小さいころの記憶をたぐっていくと、だれでも何回か、そんな経験があるはずです。ないなんて、考えられません。

その心のすみに隠れていた悲しい、しかしどこかいまとなってはまぶしいほどに懐かしいあの思い出に、ふっと戻れそうなら、黒井千次の『禁域』を開いてください。

この本は、それぞれ独立した三つの作品から成っています。第一部「花鋏を持つ子供」は就学前の幼児、第二部「果実のある部屋」は集団疎開中の六年生、第三部「闇に落ちた種子」は食糧難の時代を生きる中学生が、それぞれ主人公ですが、いずれも倉沢明史という名です。つまり、これは明史少年の三つの成長段階の物語だということもできます。そして、そのいずれにおいても、少年の心を彩っているのは、「盗む」ことへのあらがいきれない欲求なのです。彼の最初の「盗み」は、隣家に一人で遊びに行き、麻雀牌を並べて道を作って遊んでいるとき、ふいに次のようにして起こります。

《牌の行列の先からどった明史の目の前に、突然薄緑の大きな球体が二つ並んで現われる。そこは座敷の床の間にあたる場所であり、ガラスのケースにはいった背の高い日本人形が置かれ、その裏の隅には工専に通っている兄さんの空気銃がたてかけられている。明史の家のように掛け軸が下げられていないので、一段窪んだ壁が剥き出しになっているそこにはなんとなく物を置いたための空間という雰囲気漂っている。壺に似た形の大きな空の花瓶があり、絶対に動くことのない一羽の雉子がその横で尻を軽くたてて枝にとまっている。いつも見慣れたその光景の底を割って雉子の脇に現われたのが、明史の頭ほどの大きさの二つの果物なのだ。彼の手は思わずのびて果実に触れて

いる。ひやりとした手触りを、薄緑の表面に浮いた無数の筋が拒み遠ざけ、そこに不思議な肌の感触を生み出している。果実の中央上端からへたがとび出しているのだが、それにはT字形をつくるように両端を短く切り取られた元の蔓がついている。T字形の乾いたへたに指をかけてそっと持ち上げてみる。驚くほどの重さが黒い流れのようになって身体の下にはいるのを明史は感じる。果実の奥に長くためられていたなにかが、うっかりそれを持ち上げたことによって明史の中にどろりと流れこんでしまったかのようにだったのだ。そのことを知りつくしているのに、果実はわざと冷やかな振りをして床の間隅の薄暗がりには蹲っている。』

こうして明史は、メロンに出会ってしまったのでした。それは運命的な出会いであったとさえ言えそうです。彼は牌をかたづけ再びメロンのもとへ引き返します。

《躊躇いもみせず明史の手は床の間のメロンを一つ抱き上げた。実の奥に眠る重さを小さな身体で包むようにして座敷を出る。廊下が急に高くなり、沓脱ぎの石が下に遠く離れてしまっている。荷物があるので来た時のように塀を越えて帰るわけには行かず、明史は庭を横切って門から道に出る。近くに人通りはない。両手にメロンをかかえたまま自分のうちの門をあける。庭から家の中をうかがう。はたきをかける音が二階からきこえて来る。祖母が寝ている部屋の前戸はまだ引かれたままだ。茶の間にあがり、長火鉢の裏側の開き戸をあける。上下二段に仕切られた半間の押入れなのだが、上段には果物皿や半紙やちり紙がしまわれ、下段にはりんご箱を横にして重ねた中に茶筒や海苔の缶、それにせんべいや乾いた菓子を入れるおやつ用のブリキ缶などが収められている。あま

り整頓されているとはいいい難い下の段の茶筒類を一方に押しやり、そこに生まれた薄暗い空間に抱き運んで来た重い果実をそっと置いて戸をしめる。」

別に明史はメロンが食べたくてがまんできなかったのではありません。盗んだメロンを秘密の場所に隠して、後でこっそり食べたわけでもありません。

そんなところに隠しても隠しとおせるはずのないところへ運んだだけです。そして、母がそのことをいぶかしみ、自分を疑うその息苦しさを、明史はしたたかに味わうことになります。

父にしかられ、しりを打たれる。父は「食べたかったのか？」とか「悪いことだとは思わなかったのか？」と尋ねます。親としては、だれでも同じことを問わずにはいられないでしょう。答えはしかし、わかっているのです。特別食べたかったわけでもなく、悪いということがわからなかったわけでもありません。それなのにメロンと出会った瞬間、明史はどうしても手を伸ばさずにはいられない。

禁じられた世界へ、その後の苦しみと恐れの子感に震えながら身を躍らせてしまうのです。

それはなぜか。残念ながら明史自身にもそれはわからないのです。すでに引用した文体でおわかりのように、黒井千次は子どもの心に生まれ、消える微細な意識の断片を細大もらさず克明に描写していきます。その意識の断片はなぜか禁じられた世界へ接近する方向に配列されていて、彼を誘惑してやまないのです。

明史少年は次々に禁を犯し盗み続け、悔やみ続け、不安におのき続けます。が、読者は読み進むうち、その全体がけっして盜癖少年の特殊な事情ではないことに気がつくでしょう。子どもとは、お